

荻生茂卿が病中に、松岡玄達成章といふくすしより、藥を贈る時の包紙に、調合進申芍藥湯生姜一片煎如常、平生食物肝要事、唯許牛旁與大根とかきたり、おもしろき詩なり、初句と結句とを代ふれば、いづれの病何の藥にも用ひらるべき詩なり、

〔春雨樓叢書二〕産家の禁食

産婦は總て産前より産後を謹むべし。○中 貝原氏も、産後に諸積を食はする事を忌むと云、余試るに、果して血を崩して死を致す、是れに因て考るに、諸積は本と山生の物にて、何ほどの堅き土の底までも深く入りて、毎年新根を生じ、舊根は朽るも、百年を経て枯盡る事なし、其蔓も數丈を引て、水旱の難をいとはず、是れ本より性氣強き草故なり、是れを以て、山藥とて、癆瘵等の補益の效あり、其性氣強き者を弱き腹中に食すれば、益なふして返て損する事まかり、其味淡く軟虚なるを以て與ふ、本が性分強き效ありて、返て血崩する理を考ふる人なし、必しも多く與ふる事なかれ、又朝鮮の婦人長崎に來て産す、即椎菌三斤を請ふ、是を日々産婦に與ふ、朝鮮の國風皆しかりと云、本國に在て、自由なれば、尙又五斤も與へたと云、余嘗て云く、凡菌類は濕熱裏蒸して、無形より有形の物となる、故に濕物にて、病家尤忌むべき者なり、余隅州の霧島山に行て、椎の木を切て、菌を作る所に至て見るに、男女老弱の別なく、皆瘡を患ふ、皆傳染にあらず、山氣にて、自然に發すと云、山氣もあれども、朝夕の食物に、此菌を食す、是れ内に濕氣を貯ふ故に、此瘡を生ず、此山民に、其故を尋るに、菌の故にあらずと云、其朝鮮の婦人、此濕物を、産後に數斤を服するは、皆後患になるべし、越後の鱸の如し、是等は理外にて、理を以て論ずべからず、只土風のしからしむるは、教への及ぶ所にあらず、其毒に中りて死す、其毒に非ず、天命とす、肥前の島原の人、一日に三度河豚を食す、一度食せざれば、勢氣大に減じたりと云、しかれども此等は、其毒を爲して、後患となる事は希なり、都下の人の如きは、日々過食して、日に疾病となる、天年の數を縮る事をしらす、此